

【目的】女性の高学歴化、就業化に伴う価値観やライフスタイルの変化とともに、結婚観も変化してきたと思われる。結婚相手に求めるものも、かつては結婚の利点と考えられていた外的な条件（資産がある、収入が安定している、学歴が高い）よりも、内面的なもの（性格があう、人柄がよい、価値観がにている）の方が、重視されるようになりつつある。本研究では、このような最近の結婚動向を踏まえながら、女子学生とその母親の結婚観や結婚衣裳観を明らかにするとともに、より望ましい結婚衣裳について考察する。

【方法】関西圏の女子学生とその母親250組を対象に、結婚や結婚衣裳に関して、留置法と郵送法による質問紙調査（1994年11月）を行なった。分析には、クロス集計、因子分析などの手法を用いた。

【結果】母親の76%が「女性は結婚するべき、または結婚した方がいい」という考えを持っているのに対して、女子学生の半数は、「結婚は個人の自由であるので、結婚してもしなくてもいい」という考えを持っていることがわかった。また、結婚したほうがいいという結婚志向が強い人ほど、結婚式場やホテルでの一般的な形式の結婚式を希望し、衣裳の種類やお色直しの回数が多く、豪華なイメージの結婚衣裳を希望する傾向がある。一方、結婚志向の弱い人は、シンプルなパーティー風形式の結婚式を希望し、衣裳は純白のウエディングドレスのみを希望するという傾向がある。全体的に見て、母親の方が、娘より結婚志向が強いが、母親間、女子学生間にも、結婚観や結婚衣裳観に相違があることが明らかになった。